



(ヨコ 25.0cm      タテ 27.1cm)

給事<sup>ツ</sup>父母乃子をを

もうがごとしまことに

法花経乃御志みへて候

くハしくハ釈迦<sup>ニ</sup>仏

申上候了<sup>ス</sup> 恐々謹言

正月三日

日蓮

上野殿御返事

建治三年

此御消息祖師日蓮大菩薩御真筆  
無疑也。凡先祖代々所持傳來之靈  
寶也。往昔疫病流行而良久無<sup>ヤキシクシ</sup>止故群鄉  
村里及<sup>シテ</sup>于太平一失<sup>ツ</sup>命、此節移<sup>シテ</sup>于御影於水<sup>ニ</sup>  
服之則忽得<sup>スレバ</sup>強氣保<sup>チ</sup>命、或<sup>ハ</sup>削<sup>ツ</sup>于御判<sup>ハ</sup>  
香之則無不平<sup>メバ</sup>喻、故御判消失矣然而  
六十餘回以後不意於京都<sup>ニ</sup>令感<sup>ニ</sup>得<sup>ツ</sup>之  
可謂宿緣深厚故有難傾祝不少者也  
明曆第二天丙申六月吉日於京都書之

倫敦之生蓮昌寺之僧

新地九箇寺 武列江戶  
古跡三ヶ寺 建立<sup>武列江戶</sup>廣布山大乘寺  
松壽山梅嶺寺 開基

僧都



鎌倉扇谷

大乗山藥王寺 常住寶

(ヨコ 32.4cm) タテ 25.8cm)

此御消息祖師日蓮大菩薩御真筆

無疑者也、予先祖代々所持傳來之靈

寶也、往昔疫病流行而良久無<sup>ヤキシクシ</sup>止故群鄉

村里及<sup>シテ</sup>于太平一失<sup>ツ</sup>命、此節移<sup>シテ</sup>于御影於水<sup>ニ</sup>

服之則忽得<sup>スレバ</sup>強氣保<sup>チ</sup>命矣、或<sup>ハ</sup>削<sup>ツ</sup>于御判<sup>ハ</sup>

吞<sup>メバ</sup>之則無<sup>シ</sup>不平<sup>メバ</sup>喻、故御判消失矣然而

六十餘回以後不意於京都<sup>ニ</sup>令感<sup>ニ</sup>得<sup>ツ</sup>之

可<sup>シ</sup>謂宿緣深厚故有難傾祝不少者也

明曆第二天丙申六月吉日於京都書之

備前之生蓮 蓮昌寺之僧

新地九箇寺 武列江戶  
古跡三ヶ寺 建立<sup>武列江戶</sup>同廣布山 大乘寺  
松壽山 梅嶺寺 開基

僧都 日達 花押

鎌倉扇谷

大乗山藥王寺 常住寶

## 新発見の御真蹟

### 上野殿御返事について

宮　崎　英　修

本御真蹟はこのたび身延山で不慮に感得されたもので、従来の諸遺文録に知られていなかったものである。三月三日、上野殿（南条氏）にあたえられたもので、宛名の左に建治三年と年号が付けられている。この年号は宗祖の筆でなく他筆で、白蓮日興の筆跡と見て誤りはなからう。宗祖の御消息には年号月日がそろって書かれているのは大そう少なくたいていは月日のみが記されている。日興は南条氏にあたえられた書状で自分が見たものにはその到来の年号を加筆しているようである。南条殿御返事（別名大橋書）（定一一七〇）は無年号で「後三月廿四日」とのみ月日が記されているが、日興はこの書の冒頭の余白に「建治三年」と加筆した。弘安二年十二月廿七日の上野殿御返事（定一七二一）も同じく無年号であるが日付の隣りに「弘安二年到来」と加筆、弘安三年九月六日の上野殿後家尼御前御書（定一七九三）も無年号であるが「弘安三年到来」と加筆している。以上あげたうち「後三月廿四日」の大橋書の建治三年とある加筆は誤りで、後三月、すなわち閏三月のある年は建治三年でなく建治二年である。これで見ると年号の加筆はすぐに書き加えられたものばかりでなく、のちに加筆されたものも少なくはなかったと見える。この新発見の本書も、建治三年と加筆されているが如上の例から見ると確実とはいえないが他の年であることを示すものも文中になく、また本書の書風が概ね建治・弘安のころと見られるから、この加筆は本書の着到年月を示す

上野殿御返事について（宮崎）

上野殿御返事について（宮崎）

すものと見て差支えないであらう。

さて本書は本文四行の末の「仏」という字から左辺下部にかけ約四分の一ほど磨損していることがわかる。後に詳述するがこれは本書感得の縁由を書いた大乘院日達によると宗祖の御判<sub>1</sub>花押のあったところを少しずつ削りむしりとして護符として飲んだのでこのように磨滅したのであるという。大乘院日達は万治四年（改元四月寛文元年）（一六六一）二月十二日、七十六才で没しているから天正十四年（一五八六）の生れである。この御真蹟由来の末に自記しているように日達は備前の産で京都妙覚寺末岡山蓮昌寺の歴世、新地九箇寺建立、古跡三カ寺を復興した人。さらに新寺大乘寺・梅嶺寺開基であることを特記している。新寺というのは、幕府は元和八年（一六二二）正月、新しく寺院を建立することを禁じたが、寛永八年（一六三一）十月重ねて禁止、しかもなお重ねて同十二年十二月これを禁制した。<sub>2</sub>にも拘わらずこのころ多くの新寺が建立されているが、新寺建立は江戸・京都では寺社奉行、国々では国主の許可を得れば寺をたてることができた。幕府は寛永九年、各宗本末寺院の書上げを提出させたがこの本末帳（末寺帳）にのせられた寺院は古跡と称せられ、これ以後に建立された寺院は新寺（新地）といった。古跡の寺院は災害其他で崩壊、焼失してもこれを復興し再建することが出来る特権をあたえられているが、新寺は再建・復興することはい出来ない。日達は古跡の再興と共に仙台孝勝寺十二世、下総多古大乘寺九世、鎌倉扇谷薬王寺中興、和泉界経王寺十世、安芸広島国前寺十八世等中興乃至歴世として経営にあたっている。

さて、寛永七年（一六三〇）二月廿一日「身池対論」が行われたが、池上方の対論者である池上本門寺長遠院日樹、中村談林能化遠寿院日充、中山法華経寺隠居寂靜院日賢、平賀本土寺了心院日弘、小西談林能化守玄院日領、碑文谷法華寺修禪院日進等六人のうち、日達は日充をたずねて御本尊授与を請うて三月吉辰これを授与された。<sub>3</sub>また寂

静院日賢、了心院日弘、修禪院日進を訪ね、これは同年二月 日を以て授与されている。<sup>(3)</sup>これら対論の諸師のうち日充は奥州岩城、日賢は遠州横須賀、日弘は豆州戸田、日進は信州上田、日領は奥州相馬へ、それぞれ四月二日流罪を宣告され謫居地におもむいている。池上本門寺日樹は信州伊奈に配流されたが、日達はこの年寛永七年夏、日樹を訪ね、暫時滞留、離別に臨んで十月十三日本尊を授けられたが、これに

授之 大乘院日達 五十七才日樹花押

信州伊奈郡飯田郷 謫居刻 書之<sup>(4)</sup>

と脇書された。ところでこの本尊に加筆した京都頂妙寺日遵（除歴）（日樹に私淑し師資の約をむすんだ）の記によると、日達は翌八年春、再び備前をたつて飯田に下り、時に病臥中であつた日樹を看病した。日樹は同年五月十九日、配所田中八郎右衛門の邸に寿五十八をもって入寂したが、日達は恐らく最後まで日樹を看護し、随侍の二、三の弟子たちとあとしまつをおえて備前に帰つたものと思われる。

日達はどうした信心強盛の道心者で、この御真蹟所持の縁由を書き後世に伝えんとした。この縁由によるとこの御真蹟は日達が先祖より伝えられたものであつた。昔、疫病が流行した時、この御真蹟を水に写してそれをのませたところ病気がたちどころに平癒した。またこの御真蹟の御花押のところを指でなで、また少しずつむしりとしてのませたところ病気のなおらぬ者はなかった。こうして人々になでられむしられたので御判がなくなつてしまつたという。

そしてこの御真蹟も行方知れずになつていたが京都に出て来たとき思いがけずこれを感じ得ることができたというのである。この記は明暦二年（一六五六）六月にかかれていますが、日達はこれから五年後、万治四年（一六六一）二月十二日、七十六才を以て遷化した。

上野殿御返事について（宮崎）

上野殿御返事について（宮崎）

〔註〕

（1） 徳川禁令考

東武実録

日本古代法典五

（2）

岩部大乗寺檀徒石橋武右衛門家蔵

タテ一一九センチ

ヨコ五七センチ

（3）

同家蔵

この本尊は一軸仕立て日賢の本尊を真中に右に日弘左に日進の本尊が書かれ、左側に「寛永七年庚午二月日

備前岡山蓮昌

寺住侶

大乗院日達」とある。タテ一二一センチ

ヨコ五九センチ

（4）

同家蔵

タテ一三三センチ

ヨコ五九センチ

日達は日達の行状を讃歎し、そのあとに

寛永第十曆癸酉三月十三日 洛陽 頂妙寺日達花押

と記した。